

私の母

末吉 優

「もう、何でも私がこんなことしなくちゃいけないんだろう。」

私の母はフィリピン人だ。だから日本語があまりうまくない。会話はできるが、読んだり書いたりするのは苦手である。仕事を休むときは私がメールを打って送る。「仕方ない。」とは分かっているが、面倒くさくていらいらしてしまふ。学校からの手紙も、漢字が多くて読めないの、地域の支援員の方に来てもらって読んでもらう。提出物も、それからなので、ぎりぎりになることが多い。学校で、「優さんのところはまだ。」と聞かれると、どきっとして「まだです。」と小さく答える。「私のせいじゃないのに。」と、もやもやした気持ちになる。そして、同時にそんな気持ちになってしまふ自分がいやだった。母は女手ひとつで私たち兄弟を育ててくれている。仕事が大変で体がきついことも何となく分かっている。なのに優しい言葉もかけられない私！。

今年の夏は、そんな母がフィリピンに帰ることになった。フィリピンに住む祖父の体調が悪く、手術をすることになったからだ。

母と別れの日。さみしい気持ちもあったが「一ヶ月なんてすぐだろう。お兄ちゃんも来てくれるから大丈夫。」と、軽く考えていた。母がフィリピンに行っている間は、自衛隊に勤めている兄が帰ってきてくれることになっていたのだ。しかし、実際の生活が始まると、私の予想とは大きくちがうものだった。ご飯作りや皿洗い、そうじに洗たくと、二人で分担したが、大変で、母がこんなにも多くのことをしてくれていたのだと改めて気がついた。仕事で疲れているはずなのに、母はいつもたくさんの家事をこなし、私の話も聞いてくれていたのだ。うれしいことがあったときには、一緒になって喜んでくれ、いやなことがあったときは、私以上におこったり、くやしがつたりしてくれた。友達との関係になやんだときは、一生けん命考えてアドバイスをくれる。いつもまっすぐに私のことを見てくれて、私のこと一番に考えてくれる。二十六才で言葉も文化も違うこの日本に来て、つらいことや、大変なこととたくさんあっただろう。なのに「つらい」とか「苦しい」とか、ネガティブな言葉を母から聞いたことがない。母はいつもひまわりのような笑顔で私をてらしてくる。私は、母に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、涙があふれてきた。

「優は優のままでもいいんだよ。」

私が自信をなくしかけたとき、いつもそばで支え、味方でいてくれたのは母だった。いつもはなかなか言えないけれど、今なら素直な気持ちを伝えられそうな気がする。「いつもありがとう。私はお母さんの子どもに産まれてこれてよかったです。」と。そして、今度は私が母の話をたくさん聞いてあげたい。早く無事にフィリピンから帰ってこないかなあ。私は、やっぱり母が大好きだ。

評価のポイント

お母様に対するまっすぐな思いに胸を打たれました。文章の表現力も素晴らしく、共感を得やすい作品です。